

第5章では、目的関数は尤度関数で表わされているが、パラメータは最尤推定法で推定するとは限らない場合に以下の手続に従って得られたモデルの良さを評価することを提案した。[1]同一母集団から独立に無作為に抽出した標本を2つ用意する。一方の標本をパラメータ推定の為の標本(標本X)とし、他方を妥当性評価の為の標本(標本Y)とする。[2]評価されるべきモデルの型のパラメータを標本Xを用いて推定する。推定法は任意である。モデルの型*i*の推定法*j*によるパラメータの推定値を $\hat{\theta}_{ij}$ とする。[3]モデルの型*i*の $\hat{\theta}_{ij}$ による χ^2 の対数尤度を「交差妥当化によるモデルセレクトター (Model Selector by Cross Validation)」という意味で、MSCVと呼び、この値の最大になった $\hat{\theta}_{ij}$ を最適なモデルの推定値として採用する。Xによって得られた $\hat{\theta}_{ij}$ はYとは独立であるからXにとっては推定量であるがYにとってはモデルの型*i*の固定パラメータとなる。故に、どのような推定法によって得られた推定値であるかということには関係なく、MSCVは $\hat{\theta}_{ij}$ によって得られる分布の平均対数尤度の不偏推定量となる。

第6章では、本論文で提案された各方法に関する今後の課題を考察した。

東京大学

社会学博士

岡本浩一 「認知形成的観点による独自性欲求の研究」

本論文は、独自性欲求に関する先行研究を展望した上で、それらの批判を行い、その批判に立脚して新しい理論的視点を提示するとともに、その視点に対する実証的研究の結果を報告するものである。

第1章では、独自性欲求に関するSnyderとFromkinの理論的枠組みと類似度フィードバックを用いた実証研究についての展望を行った。

第2章では、独自性欲求の個人差尺度を用いた先行研究を纏めた。

第3章では、従来のSnyderとFromkinの理論的枠組みについて、(a)類似度、類似性の概念規定にあいまいさがあること、(b)高類似度認知と独自性欲求の喚起との媒介変数をネガティブな情動と仮定していることの妥当性が保証されていないこと、の2つの問題点を指摘し、第4章で、その議論を踏まえ、独自性欲求に関する認知形成的なモデルを提示した。要約すれば、独自性欲求の高い人は、自他の独自性に関する認知システムのよく発達している人であろう、という視点である。

第5章では、SnyderとFromkinの独自性欲求尺度の邦訳版を用いて、この尺度の信頼性、妥当性に関する実証的データの補強する研究を報告した。本研究で用いられた日本語版尺度は、(a)内的一貫性が高く ($\alpha =$

.765), (b)再検査信頼性係数が高く ($r = .876$), (c)承認欲求との相関が十分低く ($r = -.063$), 総合的に見て、心理尺度の満たしているべき特性を備えていた。また、この尺度の概念的妥当性は以下のような分析によって支持された。(d)被験者の日常的な好みの統計的独自性から算出される総合的な選好独自性の指標と独自性欲求尺度とのスコアとのあいだに有意な相関があった、(e)発想独自性のスコアと独自性欲求スコアとのあいだに、有意な負の相関があったこと、から、この尺度の概念的妥当性が支持された。

第6章では、日本人大学生に見られる独自性欲求スコアの性差について、詳しい実証的検討を行った。その結果、独自性欲求スコアの性差が安定して有意であること、その性差が独自性欲求尺度以外の独自性欲求に関わる指標でもみられること、さらに、独自性欲求の性差が性別アイデンティティの個人差とシステムティックに相関することを検証した。

第7章では、購買選好における独自性指向と独自性欲求との関係を示すための研究を報告した。まず、さまざまな商品に関する購買動機尺度因子の主要なものほとんどと独自性欲求とが有意に相関することを確認した。さらに、購買選好における独自性志向の新しい個人差指標を作成し、独自性欲求尺度の個人差との関係をより直接的に検証した。

第8章では、「独自性欲求の高い人では、全般的な対人認知に対する独自性の認知次元の寄与が相対的に大きいであろう。」という予測を検証した研究を報告した。

第9章では、独自性次元の認知次元としての有意味性の指標と独自性欲求スコアとの関連を示す分析を報告した。

第10章では、独自性に関する自己情報の自発的検索量と独自性欲求スコアとの相関を検証した。

第11章では、自己の独自性に関して肯定的回答に要する反応時間が短い人ほど独自性欲求が高いという仮説を検証した実験結果を報告した。この結果は、独自性欲求の強い人ほど独自性に関して認知形成度が高いことを示すものとして解釈した。

第12章では、本博士論文に含まれる実験結果を、独自性欲求に関する認知形成的な視点との関連で吟味した。さらに、本研究の意義と今後の発展方向、他の研究領域、とくに、対人認知スキーマ形成度の研究と、人格検査研究への応用可能性について、考察を行った。

東京都立大学

文学博士

繁多 進 「アタッチメントの発達とその規定因」

本研究の目的は2つに大別される。第1は、日本の子